HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第1回教職課程担当教員会議を終えて
Citation	北海道大学教職課程年報, 13, 124-126
Issue Date	2023-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88777
Type	other
File Information	060_2185-9809_13.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第１回教職課程担当教員会議を終えて

教育学部教職課程委員会

守屋　淳（委員長）

2022 年度、数年ぶりに教職課程委員に復帰すると同時に委員長就任を命ぜられた。また教職課程の自己点検・評価が始まったことを知らされ、新たに創設された点検・評価小委員会の初代委員長にも就任することになった。こうした中、点検・評価をしなければならないなら、形式的にやらされる評価ではなく、少しでも教職課程の改善につながる実質的な取り組みにしたいと思った。最近、次々と大学に課せられる点検・評価は、単に我々研究者や事務職の時間を奪うだけでなく、何の意味もないおざなりな報告書を生み出すだけで終わっていると思うからだ。

私が２つの委員会の長として取り組むことになった自己点検・評価には、すでに、おそらくこうした私の思いと共通する態勢が、浅川・前委員長のもと前年度の教職課程委員会において準備されていた。この教職課程担当教員会議も、まさに実質的な改善に向けて、ざっくばらんに担当者同士の情報交換、情報共有を通して、じわじわと北大教職課程の体質改善を目指す場なのだと思う。その意味で、参加者が必ずしも多いとは言えなかったことは残念だったとはいえ、初回としてはいいスタートを切れたのではないかと思っている。

崎田嘉寛（委員）

教職課程委員会の委員として、教職課程担当者会議、およびそれに先立つ２つの FD（宮崎隆志先生「学校の再定義に向けて―教職課程の可能性―」2022 年 8 月 5 日、浅川和幸「教職課程科目をどのように構想し実践したか―幾つかの科目担当するなかで分かってきたこと（浅川の場合）―」2023 年 1 月 13 日）に企画・構想から携わった。この立場からは、文部科学省による教職課程の自己点検・評価が義務づけられなければ、今回のような取り組みは実施されなかったと改めて振り返ることができる。これまでに教職課程の担当者間で意思疎通が難しかった理由の一端に触れつつ、他方で、教職課程と教育学研究の歴史と可能性、研究者集団が下意上達によって生成する教職課程の方向性などを知る機会となった。

ただし、この取り組みを継続し、あるべき目的地に辿り着くよう歩むことは、簡単ではないと感じた。一方で、保健体育の教科教育法を担当する立場からは、他の教科教育法を担当する先生方がどのような考えを抱いて授業を展開しているのかを知ることができたが、抱える困難は異なることを痛感した。教職課程担当者会議では受講生の多さが問題となったが、保健体育では少なすぎて困っている。教育学部以外でも保健体育科の免許状取得を位置づけてほしいし、模擬授業を他教科の教科教育法の受講者と合同で実施できるような仕組

みもあればと思うが、難しそうである。

光本　滋（委員）

2022年度、4回目の教職科目「教職入門」を担当した。今回は「文系クラス」（火曜日5講目）とともに「理系クラス」（火曜日1講目）も持つようになったこともあり、いくつかの新しい試みをしてみた。その一つとして、教職課程の締め括りの科目となる「教職実践演習」を取り終えた先輩（4年生、大学院生）を招き、教職課程での学びをふり返って話をしてもらった。果たして、先輩の話はこれから教職課程を履修していこうとする学生たちには大いに刺激となったようだが、私にとってもとても有益であった。先輩が異口同音に語ったことに「実践的な内容が少ない」というのがある。一部の教科教育法の授業において模擬授業の機会がないことや、教職科目が全体に「理論寄り」であるというものだ。これらのことはアンケートでも指摘されていたが、今回、直接に話を聞き、背後ある問題として、教育実習に行った際、うまく授業をできるか、子どもたちに通用するかを学生がとても不安に感じていることがわかった。

しかし、あらためて考えてみると、学生はなぜ授業を行うことをそこまで不安に感じるのだろうか。その理由についても探る必要があるが、教職課程の先行きが見えないことは学生の不安の一因であるかも知れない。私も北大の教職課程の実態、全体的な状況がどうなっているかよくわかっていない。「教職入門」では現場の教師たちをゲストスピーカーとして招き講義をしてもらっているが、どうすればあのように「たくましい」教師になることができるのか、現場に出てからの話はともかく、教職課程におけるどのような学びが将来につながるのか、学生がイメージしづらいのももっともである。第1回目の教職課程担当教員会議を終えたいま、私の理解は少し深まった。来年の「教職入門」ではさらに新しい試みをしてみようと思う。

篠原岳司（委員）

私は本学の教職課程の運営を担当するようになりしばらく経つが、この度の「教職課程担当者教員会議」の開催は本学にとって非常に画期的な事であり、この間の北海道大学の教職課程運営における課題に対応していくための大きな一歩になったと感じている。参加された教員各位からは教職課程へのそれぞれの関わり方、問題意識や関心が表され、また教職課程で担当される授業等の実践上の工夫や悩みがかわされた。このことは、本学教職課程でともすれば充分に共有されてきたとは言い難い北海道大学としての教員養成の目的の共有、そしてその目的に通底する課題意識の発展に大きなきっかけをもたらすものになったと捉えている。本学教職課程は教育学部を責任部局としながら各部局をまたがり全学的に運営

されるものであり、多くの非常勤講師や外部ゲスト講師の力によって全体が形成されていることを鑑みるならば、その全体像を各自がつかめるにようにするはたらきかけと、それをつかむための協議の機会は今後も間違いなく重要となるだろう。本学教職課程に携わってきた身としても、この取り組みは今後も継続させ、教育学を中心とする各学問領域の知見や最新の成果を元に、学生たちの問題意識や感性を的確に理解しながら、次代を担う子ども・若者の育成に携わる学校教員の養成に責任を果たしていきたいところである。

浅川和幸（委員）

文部科学省は開放制教職課程をもつ各大学に「点検・評価」を行うことを要請した。それを本学でどのように受け止めるのか。このことに前委員長として対応してきた。その考え方は現守屋委員長が書いてくれたことに尽きる。

この「教職課程担当教員会議」は「点検・評価」の核心部分として構想した。現在の厳しい教職環境の下で奮闘することになる未来の教師を、どのように学校に送り出すのか。教職課程を担当する教員たちが集い、日々悩み・工夫する実践を交流する。第１回目の会議はささやか船出となったが、非常勤講師の教員もおいでになり、熱心に実践上の工夫を、学生に伝えねばならぬことを語ってくださった。この場を借りて感謝を申し上げたい。

未来の日本を担う若者を育てることに長期間携わる教師は、言わば「未来への贈与」である。「人口減少」による日本国・社会の全面的な衰退・縮小局面において、私たちのボトム・アップの交流の継続と実践の改良が、「未来への贈与」を育てるという意義のある事業の一翼を、誇りに持って担えるようになることを願って止まない。